

名古屋などで開催中の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」。美術館だけでなく、ビルの壁や空き店舗など街なかの空間を使った現代アートの展示が特徴の一つだ。時を同じくして、愛知県春日井市の一風変わった場所で、現代美術の展覧会が開かれている。暗く、長い空間に足を踏み入れると。

(宮川まどか)

廃線トンネル アートで演出

愛知・春日井で現代美術展

JR中央線定光寺駅。駅から庄内川沿いに三百ほど進むと、赤れんが造りの重厚な

トンネルが見えてくる。ここは一九〇〇年、名古屋市と岐阜県多治見市とを結んで開通

した旧国鉄中央線の上。複線電化に伴い六六年、廃線となった。光を浴びたのは二〇〇六年だ。市民の手で、全長八キロにわたって十三基のトンネルの

空間の意味を強調 産業遺産再生へ弾み

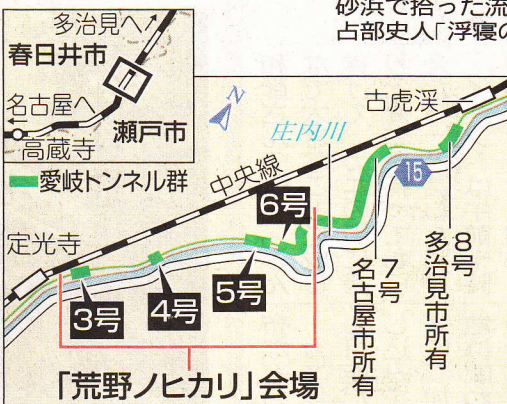
産業遺産再生へ弾み

上真善さん(六)らが目を付けたのが、現代美術だ。「トンネルの新たな魅力を呼び起こすためにも、美術家の協力を求めた」と村上さんは振り返る。

プロデューサーを任せられた名古屋芸術大の高橋綾子准教授は「トンネルそのものがアートだと感じた」と初めて見た時の印象を話す。「トンネルは暗闇の世界。でも、先には必ず光がある。日本が閉塞感に包まれた今、美術展をつく



砂浜で拾った流木で作った船を浮かべた占部史人「浮寝の旅」=愛知県春日井市で



存在を確認し「愛岐トンネル群」と命名。そのうち、春日井市に位置する一・七キロ分、三・六号のトンネルが経済産業省の「近代化産業遺産 続33」に認定されている。

今回の展覧会「荒野ノヒカリ」は、NPO法人「愛岐トンネル群保存再生委員会」(会員百十三人)が整備する、この四基が会場だ。再生委は〇八年から、春と秋の計十日間前後、四基を公開。自然を見ながらの散策が人気で、年間三万人もの来場者を集めてきた。

半面、訪れる人の半分は六十歳代以上。「未来へ引き継ぐには若い世代にも見てほしい」と、再生委事務局長の村

る上で、それが印象的だった。九組の出展作家は、愛岐トンネルという、特別な空間の意味を引き立てる作品を提示できる人を選んだという。だからだろう、来場者を待ち受ける九組九様の作品は、音や言葉、光など、シンプルな仕掛けが目を引く。

中に入っただけ。占部史人「浮寝の旅」は、砂浜で拾った流木で作った船が浮かぶ。トンネルはいわば、過去と現在を結ぶ時空の海だ。soft pad「1961」は、六

一年当時の時刻表をもとに蒸気機関車(SL)の音を再現。一定の時間になると、レールを失ったトンネル内を、

「荒野ノヒカリ」は二十七日までの土、日曜、祝日だけ公開。有料。(事務局)電話080(9492)5458

市民が守った貴重な産業遺産と、現代美術。組み合わせの妙は今後、どんな可能性を生むのか。

そのうち七号トンネルは名古屋市の所有地にある。中は、同市の「ごみ最終処分場」である愛岐処分場用地内に建てた際に出た土砂で埋まっている。同市は「土砂の撤去や公開が前提でなく、処分場管理の一環」としながらも、十月からトンネル内部の調査を始める。

見えないSLが走り抜ける。藤本由紀夫「Room(Aigi Tunnel)」は四台の電子キーボードを使った作品。壁に反響する不協和音は、漆黒のトンネルを特別な空間に変える。そして、トンネル群の最後にあるのは、ドリアン助川「あなたへの100の言葉」だ。かこの中の紙片には、一人一人に贈る言葉が書かれている。記者には「あっちの偉そうな人より、君の方が凄いなよ」。気付